
マリアの魔法

伏見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリアの魔法

【Nコード】

N5549Y

【作者名】

伏見

【あらすじ】

超秀才、だけど、貧乏な女子高生、桜庭毬。ある日、交通事故に遭い、短すぎる一生を終えると思ったら異世界トリップして——そこで毬が出会ったやさしい貴族の老夫婦に拾われ、新しい環境で音楽の才能を伸ばしたり、勤勉な態度で色んなことを学び続けて穏やかに日々過ごした……はずなのに、ある日、国のお城から一通の手紙が届き——展開は遅いですけど恋愛ものです！いちやうぶはちゃんとしてもらいます！

第一話 毬

最後の記憶は眩しさで思わず目を瞑るほどの明るいライトと目と鼻の先にあるトラックだった。

考えなくてもわかる。私は死ぬんだ。

私、桜庭毬。高校二年生の16歳。

普通の人生だったと思う。家が超がつく程の貧乏だということ以外は。

両親はとも私によくしてくれたし、私はそれに応えるために頑張ってきた。奨学金のために学校の成績はいつも首席を譲らなかったし運動もできた。

父が起業で失敗し、莫大な借金をつくってしまい、超貧乏になった。

特に貧乏について不満もなかった。そんなことよりもさっさいい大学に入学して卒業し、早くいい職に就いて両親を助けたかった。父はよく「毬の好きなことをすればいい。なにも無理することはない。だから、甘えていい。欲しい物があれば欲しいといえればいい」といった。母は「毬、あなただけの道を進めばいいの。あなたの為ならどんなことだってしてあげられる」と優しくしてくれた。

でも私は小さい頃から自分の家が貧乏なことをしていた、だから簡単にあれがほしいこれがほしいとはいわなくなっていた。

でも、本当は音楽を習い続けたかった。

第二話 天使の迎えは

音楽は好き。

歌を歌うのも、楽器で音を奏でるのも。

けどそれができたのは小学生まで。中学生から家庭がかなり危うかった。

(……)

(……ん……)

徐々に目がさめてきた。

横たわっていたらしい体を立たせる。

「……ここどこ？」

わずかな月明かりだけを頼りに、目を凝らしてみる。

目の前には月が映った湖と無数に生えている木々だけしかない。

——たしか私は……トラックに引かれて死んだはず……

学校が休みだったからラフなワンピース一枚とカーディガンを着て、図書館にいつて、帰りに、トラックに…………。

——あー私きつと今天国にいるんだ。

——天使の迎えは、ないのかな？…

「…………ふえつくちっ」

少し寒いなあ。

立ち上がり、周りを見回してみる。

——天使様は道にでも迷ってるのかなあ…たしかに森は深そうだし

……

そのとき、ふと思いついた。

歌おうかな。

歌えばきつと私がここにいとわかるし、それに…私も久しぶりに伸び伸び歌いたい…………！

——歌おう。歌うなら魂を誘う歌にしよう！

第三話 トラクの森にて

俺は今報告のあったトラクの森にいる。

デイルに俺自身が行くことに反対されたが、こういうことは自分で見ることが大事だ。

というより、体が勝手に動いていた。のほろが正しい。

部下の報告を聞いた瞬間、デイルの言葉を最後まで聞かないまま、転移の魔法を使っていた。

月明かりだけを頼りに、トラクの暗い森を進む。

部下の報告によると、地図のトラクの森の中心にピタリと魔法針が反応したそうだ。

魔法針は、とくに巨大な魔力に反応し、そこを指差す。

(……湖、か。)

トラクの森の中心には湖がある。

そこに巨大な魔力の正体があるようだ。

一体だれがこんな巨大な魔力を生み出せるのだろうか。

……いったい何のためにこんな魔力を使って一体どんな魔法を行使したのか……。

……もしかこのリーフ国を脅かすものではないだろうか……。

嫌な考えが頭から離れない。

真っ暗な闇の森をゆつくりと、確かに進んでいく。

このトラクの森には魔獣の一族、白銀の狼ミラ族が住んでいる。
あんな巨大な魔力を間近で触れると、人間は狂って死に絶えるだろう。それほどの魔力だ。

いくら魔獣といえども、この巨大な魔力の瘴気を近くであてられて、狂っているだろう…。

それが魔法を使ってあたりを明るくしない理由だ。

とにかく、ミラ族を刺激しないように、慎重に進むしかない。

とにかく、周りに気を配りながら歩いていると、風に乗せられてかすかに音が聞こえた。

『……………え……………い……………』

(……………?)

女の声だ。耳を澄ませる。だが、歩みは自然と速くなっていくのを感じた

『……………わ……………あ……………』

まるでその声に導いてもらっているかの様に、足が勝手に動く。進むべき道を最初から知っていたかのように。

声は徐々に大きくなる。その声の主に近づいてきたのだろう。

——そして、見えた。青白い月明かりに照らされて、黒髪の少女が湖のほとりに立っていた。

少女はゆっくりと息を吸い、凜とした姿勢で月を見上げながら歌っていた。

聞いたこともない、神秘に包まれた言葉で。

『おいで　おいで

私はあなたを誘うもの
あなたは私を導くもの

おいで　おいで

私は魂を誘うもの

あなたは魂を導くもの

あなたしか知らない場所

天の果てへ

連れて行ってほしい』

肌寒い空気の中、少女の声だけが空気を震わせ、自分の心でさえも震えていた。

思わず息をのむ。思考が完全に止まった。

青白い月明かりに照らされた少女は、今にも崩れ落ちそうなほど、か弱く繊細なガラス製品を思わせた。

(……………きれいだ。)

第四話 ひい

『おいで おいで

私はあなたを誘うもの
あなたは私を導くもの

おいで おいで

私は魂を誘うもの

あなたは魂を導くもの

あなたしか知らない場所

天の果てへ

連れて行ってほしい』

歌の残響が当たりに響き渡った。

森は元の静けさに戻る。

(……まだ来ないのかなあ)

少し落胆していると、背後から何やら物音が聞こえた。

(！……もしかして天使様？)

振り返ってみると、暗闇の中無数の赤い光が浮かんでいる。

「……ひっ……」

ゴクリと唾を呑む。

「……ガルルルル……」

赤い光はゆつくりとこちらに近づいてくる。

わずかな月明かりに照らされてそれはあらわれた。

(……………オオカミ……………?)

そこにいたのは銀色の毛をなびかせ、赤い瞳でこちらをじっと見ている3匹の白銀の狼だった。

「ま、まさかあなたが迎えってわけじゃないよね……? あはは……」
思わず乾いた笑いが口から出る。

(…あのー心なしか、こつちをにらんでますよね……?
顔もすごい眉間にしわが寄ってますよね……
今にも吠えそうだし…暗いからよく見えないけど…)

「ガルルルルル……」 「グルルルル……」

「ま、待ってください、話し合いを…しませんか?」

そして三匹の狼が私に向かって飛びかかってきた。
私は自分の体が後ろに倒れるのを感じた。
目の前が真っ暗になった。

第五話 人の子

(……！)

今のこの感じは…

隣の目配せをする。

お互い頷き合う。

一瞬だが、ものすごい量の魔力が森に伝った。

自分と隣にはこのミラ族の中でも最上位の魔力を持っているから、ある程度魔力の耐性が付いているが、他のはこの影響で狂っていてもおかしくはない。”この森で一番偉い”のなら心配せずとも大丈夫だろう。

隣のと一緒に”この森で一番偉い”のと一緒に他のを抑えないといけない。

その時、目の前にその”この森で一番偉い”のがいた。

「……………」

隣のと”この森で一番偉い”と自分は何も言わずに、目を閉じ、集中し始める。

かける魔法は強制的に他のミラ族を眠らせる魔法。

目をゆっくりと開ける。時間は少しかかったが、どうやら成功した。

そして互いを確認せず、走り出す。
目指すは先ほどの巨大な魔力のいわば、震源。

『あ——………を………』

(………人の子………?)

隣のも鼻をすんすん鳴らす。

”この森で一番偉い”は少し目を細めた。

『おいで　おいで
私はあなたを誘うもの
あなたは私を導くもの

おいで　おいで
私は魂を誘うもの
あなたは魂を導くもの
あなたしか知らない場所
天の果てへ
連れて行ってほしい』

そして、見えた。

湖の近くで人の子が月を見上げて歌って立っていた。

足を止めて、じっと人の子を観察するように見る。

まだこちらには気が付いていないみたいだが、ミラ族は暗闇でも目が利く。

人の子のすぐ後ろに”黒い瘴気”がかすかにだが見える。

(……)

人の子には魔力が感じられない。そのことがとても不思議に思えたが、だから”黒い瘴気”が見えないのにも納得がいく。

”黒い瘴気”は魔力がないと見えることすらできない。

隣のと”この森で一番偉い”とで目を合わせ、互いに頷く。

”黒い瘴気”はどちらにせよ、この森に害をなすものだ。消さなければならぬ。

ゆっくりと”黒い瘴気”に近づく

「ひっ」

人の子がこちらに気付いたのだろうが、自分たちには”黒い瘴気”しか興味がない。

「…ガッル…」…「…グッルル…」

警戒してか、自然とうなり声が隣のと一緒にあがる。

「ま、待ってください！は、話し合いを…！」

そして隣のと”この森で一番偉い”で”黒い瘴気”に飛びかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5549y/>

マリアの魔法

2011年11月24日21時03分発行